

津久井城跡

本城曲輪群

(相模原市津久井町No.17遺跡)

調査期間 20090416～20090531

所在地 相模原市津久井町根
小屋字城山、太井

時代 中世



作成日:20090714

概要

本遺跡の発掘調査は神奈川県津久井土木事務所による県立津久井湖城山公園整備事業に伴い実施されました。

遺跡は神奈川県北部の相模原市、JR横浜線橋本駅の西約7kmに位置する城山西峰山頂部にあります。

津久井城は城山と呼ばれる山全体を利用した戦国時代の山城で、16世紀には後北条氏側の城として機能していたようです。平時には麓付近で生活し、戦の時に山城に登り備えるものと考えられます。豊臣秀吉の小田原攻め(1590年)の時に落城し、廃城となりましたが、現在も土塁(どるい:土を盛り上げてつくった土手)・竪堀(たてぼり:斜面を縦方向に掘削した堀)・曲輪(くるわ:土塁や堀で区画された平地)などの遺構が良好に残っており、江戸時代に作られた絵図も伝わっています。

今回調査を行ったのは山城の山頂主体部である「本城曲輪群」で、昨年に引き続き今年で2回目の調査になります。土塁に囲まれた中心部である本城曲輪とその周りを帯状に囲む米曲輪、東側の『土蔵』曲輪で調査を行いました。側溝と考えられる石を組んだ溝状遺構の他、曲輪内を隔てる石列遺構が見ついています。特に米曲輪から本城曲輪へ通じる『モン』と呼ばれる部分からは、石敷遺構と階段状に石を並べた遺構が見つかりました。虎口(こぐち:曲輪への入口)



▲石列遺構検出状況



▲階段状遺構検出状況

の可能性が高く、石敷遺構の直角に折れ曲がる箇所を見ると、強い防御性が感じられます。

遺物はかわらけ(素焼きの器)や常滑(とこなめ)の甕の破片などが出土しています。出土遺物のほとんどは中世のものですが、古代の土師器や須恵器も少量出土していることから、中世以前から城山では人の活動があったことが窺えます。



▲石組溝(暗渠)検出状況